



Title	タイ語を母語とする日本語学習者にみる自動詞と他動詞の使用傾向：実現可能場面における行為の結果の表現を中心に
Author(s)	セーリム, パンニー
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 34-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54490
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイ語を母語とする日本語学習者にみる自動詞と他動詞の使用傾向 —実現可能場面における行為の結果の表現を中心に—

パンニー セーリム

1. はじめに

日本語には、「閉まる」「閉める」などのように、自動詞と他動詞が対をなす動詞（有対動詞）が数多くあり、実際の場面では状況に応じた使われ方を区別する必要がある。しかし、タイ語では、日本語ほど自動詞・他動詞の概念を意識しないため、日本語の自動詞と他動詞はタイ語を母語とする日本語学習者の混乱を招くと予想される。

筆者も、(1) のように日常生活のトラブルに遭って、誰かに助けを求めたい時に、日本語で自動詞と他動詞のどちらを使用したらいいのか、可能形にすべきかどうか、迷った末に誤用してしまうことがある。

(1) ロッカーのキーが {回らない_自 / 回せない_{他可} / *回れない_{自可}}。

そこで、本稿では、筆者と同様にタイ語を母語とする日本語学習者を対象に、日常生活で遭遇する実現可能場面¹における行為の結果の表現（自動詞・他動詞）の使用実態を明らかにするために、調査を行う。

2. 先行研究

2.1 行為の結果を表す表現（自動詞と他動詞の可能形）に関する先行研究

行為の結果を表す表現については多くの研究がなされており、自動詞を他動詞の可能形に置き換えられると述べている先行研究（森田 1981、Jacobsen 1991、庵ほか 2001 など）がある。

森田（1981）は（2）のように行為者が実現を試みた結果を問題にしている自動詞文「載らない」は、「載せられない」という他動詞の可能文に置き換えても表現事実の違いが生じないが、自動詞を使う場合は、意図的行為の結果を、他動詞の可能形の場合は意志的行為そのものを問題としていると論じている。また、庵ほか（2001）も（3）を挙げ、他動詞の可能文は動作主がある能力を持っているか否かという状態を表す表現であり意志は問題とならないことから、動作主の意志を考慮に入れない自動詞文との間に類似性が見られるとし、自動詞文と他動詞の可能文は、似た意味を持っており、いずれも使用できると述べている。

(2) 荷台が高すぎて荷物が {載らない_自 / 載せられない_{他可}}。 (森田 1981 : 235)

(3) このドアは重いなあ。よいしょ、よいしょ。ふう。

やっと {開いた_自 / 開けられた_{他可}}。 (庵ほか 2001 : 155)

しかし、文脈や場面により自動詞と他動詞の可能形の意味の違いや使い分けが区別されると論じる先行研究もある（石川 1991、本多 2013、楠本 2014 など）。

石川（1991）、楠本（2014）では、(4) (5) のように、行為の結果を表現する際に自動詞を使うほうがよい場合があり、他動詞の可能形を使うことで語用上の不自然さが表れると述べている。

(4) (ドアなどをあけようとしているが)「ドアがあきません自。」（石川 1991 : 67）

(5) 肩が痛くて、腕が上がらない自。（楠本 2014 : 103）

実際に、日本語母語話者がどのような表現を使用しているかについては、小林（1996）、セーリム（2014）などの調査結果で、自動詞を使用する傾向が他動詞の可能形より顕著に高いということが明らかになっている。

2.2 日本語学習者の自動詞と他動詞の使用傾向に関する先行研究

これまで日本語学習者の自動詞と他動詞の可能形の使用に関する研究は、小林 1996、封 2005、楊 2007、望月 2009、市川 2010、王 2012、関 2014 等があるが、タイ語を母語とする日本語学習者を対象にした他動詞と自動詞の使用に関する研究は、管見の限りこれまで Chawengkijwanich（2008）、セーリム（2013）でしか行われておらず、先行研究は少ないと言える。

Chawengkijwanich（2008）は、タイのタマサート大学教養学部日本語学科におけるタイ語母語話者である中上級日本語学習者が作った、自動詞と他動詞の誤用の例文を 250 文集めた。それぞれの文を分析し、誤用の要因として、自動詞と他動詞の混同による誤用（単語を覚えていない、概念や使い方が分からない等）、特別な意味を持つ事態による誤用（日本語母語話者の物事の捉え方が分からない、タイ人にはわかりにくい等）が挙げられている。

さらに、Chawengkijwanich（2008）はタイ語を母語とする初中級の日本語学習者の自動詞と他動詞の習得について調査している。中石（2005）と同じ結論となっており、必ずしも他動詞より自動詞のほうが習得が難しいとは限らない、また、格助詞や文の意味（文脈）を考えずに慣れている動詞を選択する傾向にあるのは初級の段階の学習者であり、レベルが上がるにつれてその傾向が低くなることが分かっている。

また、セーリム（2013）では、Chawengkijwanich（2008）のタイ語を母語とする学習者にわかりにくい、特別な意味を持つ自動詞他動詞（可能の意味を持つ自動詞、行為の結果を表す自動詞など）があるという指摘と同じ問題を取り上げ、タイ語を母語とする日本語学習者による行為の結果の表現に注目し、タイ語を母語とする中上級レベルの学習者 20 名を対象に、タイ語から日本語への翻訳テストを行った。その結果、行為の結果を表現する際に「他動詞の可能形」「自動詞」「自動詞の可能形」を用いる学習者が見られ、自動詞の可能形の使用に問題を抱えていることが明らかになった。その要因として、母語の影響や自動詞の使用

条件に関する知識不足などが挙げられている。

以上の先行研究よりタイ語を母語とする日本語学習者の自動詞と他動詞の可能形の使用の問題点が明らかにされているが、Chawengkijwanich (2008)、セーリム (2013) の調査では、設問が一文で示されており、母語であるタイ語も提示されたため、コミュニケーション上の場面、発話場面や発話時が限定されておらず、実際の使用傾向が明らかにされているとは言えない可能性がある。したがって、テスト調査で設ける場面は、話者(行為者)と相手との会話形式にし、より状況が分かりやすくなるように設定するべきであろう。

3. 調査概要

3.1 調査目的

本稿では、タイ語を母語とする日本語学習者を調査対象とし、実現可能場面における行為の結果を表す際にどのような表現を使用しているか、どのような誤用を犯すのかを明らかにすることを目的とする。

3.2 調査対象

本調査では、2014年7月から2015年3月にかけてタイ語を母語とする日本語中上級レベルの学習者(以下、TJL)42人を対象に文完成テストを行った。TJLは全員タイの大学で日本語を専攻し、調査時に日本に滞在していた大学生・大学院生であり、男性12人、女性30人である。年齢は20代前半～30代前半、平均年齢は23.3歳であり、日本語能力はN3取得者が15人、2級・N2取得者が14人、1級・N1取得者が13人である。

また、対照群として日本語母語話者(以下、JNS)50人にも同様のテストを実施した²。JNSは関西の大学に通う大学生・大学院生であり、男性19人、女性31人である。年齢は10代後半～30代前半、平均年齢は21.6歳である。

3.3 調査内容

本調査は、TJLが実現可能場面で行為の結果を表現する際に、どのような表現を用いる傾向があるのかを調べるために、行為を実現しようとしている場面を10場面取り上げた³。各場面を行為者と相手との会話形式とし、行為者が意図的に行為をしようとしたが実現できない場面と、相手からのアドバイスで再度試みた結果、行為が実現したという二つの場面を設けているため、設問は全部で20問となる。

調査用紙で取り扱う動詞は有対動詞10組であり、形態的にも意味的にも自動詞と他動詞が対になっている動詞である。動詞は初級の語彙⁴を採用したが、「落とす-落ちる」、「壊す-壊れる」などの、本来意図的にその行為を実現することはない、あるいは実現する頻度が少ないと思われる動詞は取り除くこととした。解答欄には動詞の語幹を、その後ろに、実現できない場合は「～ない」、実現できた場合は「～た」を提示した。TJLに自動詞・他動詞

リストを与え⁵、リスト内の動詞から動詞を選んでもらい、選んだ動詞の形を自由に書き込んでもらうこととした。また、使用可能な表現が二つ以上ある場合は、最も頻繁に使用する表現を書いてもらい、日本語を母語としない T JL の回答時の負担を減らすために、回答には影響を与えない範囲で、調査用紙に場面の状況説明とアドバイスの内容のタイ語訳、及びイラストを載せた。

以下に、自動詞・他動詞リスト、設問例、設定場面を示す。

【自動詞・他動詞リスト】

1.	蓋を <u>開</u> ける	蓋が <u>開</u> く
2.	キーを <u>回</u> す	キーが <u>回</u> る
3.	コンタクトを <u>入</u> れる	コンタクトが <u>入</u> る
4.	字を <u>消</u> す	字が <u>消</u> える
5.	ドアを <u>閉</u> める	ドアが <u>閉</u> まる
6.	歯磨き粉を <u>出</u> す	歯磨き粉が <u>出</u> る
7.	ブラインドを <u>上</u> げる	ブラインドが <u>上</u> がる
8.	指輪を <u>外</u> す	指輪が <u>外</u> れる
9.	マッチを <u>つ</u> ける	マッチが <u>つ</u> く
10.	糸を <u>通</u> す	糸が <u>通</u> る

【設問例】

【場面1】 田中さんは、ジャムの瓶の蓋を開けようとしています。

สถานการณ์ที่ 1 ทะนะกะกำลังเปิดขวดแยมอยู่

田中：ウッ！

木村：どうしたの？

田中：ジャムの蓋、開_____ない。

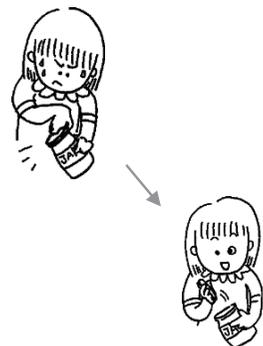
木村：蓋に輪ゴムをはめてみたら？ ลองใช้หนังยางรัดฝาดูสิ

田中：そうだね。やってみる。

.....

木村：どう？

田中：あ、開_____た。ありがとう。



【設定場面】

場面	場面の内容	問	実現不可能・可能	自動詞	他動詞の可能形
場面1	ジャムの蓋を開けようとしている	問1	実現不可能	開かない	開けられない
		問2	実現可能	開いた	開けられた
場面2	キーを回そうとしている	問3	実現不可能	回らない	回せない
		問4	実現可能	回った	回せた
場面3	コンタクトを入れようとしている	問5	実現不可能	入らない	入れられない
		問6	実現可能	入った	入れられた
場面4	字を消そうとしている	問7	実現不可能	消えない	消せない
		問8	実現可能	消えた	消せた
場面5	車の後ろの扉を閉めようとしている	問9	実現不可能	閉まらない	閉められない
		問10	実現可能	閉まった	閉められた
場面6	歯磨き粉を出そうとしている	問11	実現不可能	出ない	出せない
		問12	実現可能	出た	出せた
場面7	ブラインドを上げようとしている	問13	実現不可能	上がらない	上げられない
		問14	実現可能	上がった	上げられた
場面8	指輪を外そうとしている	問15	実現不可能	外れない	外せない
		問16	実現可能	外れた	外せた
場面9	マッチをつけようとしている	問17	実現不可能	つかない	つけられない
		問18	実現可能	ついた	つけられた
場面10	糸を通そうとしている	問19	実現不可能	通らない	通せない
		問20	実現可能	通った	通せた

3.4 分析方法

調査結果の分析に際しては、行為の結果の表現における動詞の使用傾向を見るために、各設問において TJL の使用した動詞の回答部分のみを分析対象とする。テストにおいて使用された動詞を、「自動詞」(自)、「他動詞の可能形」(他可)、「他動詞」(他)、「自動詞の可能形」(自可)、「自動詞のテイル形」(自テイル)、「他動詞のテイル形」(他テイル)、「他動詞の受身形」(他受)、「動詞の活用の間違い」(誤活用)に分類し、それぞれの動詞の種類の出

現の割合や、設問ごとの割合を JNS と比較する。

4. 調査結果と考察

本章では、調査結果を分析し、JNS と比較しながら TJL 全体の使用に関して考察する。

4.1 実現可能場面全体にみる自動詞・他動詞の使用傾向

まず、実現可能場面全体における自動詞と他動詞の使用傾向を見るために、TJL、JNS が回答した各場面での動詞部分を自動詞と他動詞に分類し、全設問を合わせた各動詞の使用の割合を出した。その結果が図 1 である。

図1で分かるようにTJLが回答した表現はJNSの回答より種類が多い。JNSの回答は自動詞と他動詞の可能形の二種類であるのに対して、TJLでは、自動詞と他動詞の可能形以外に他動詞、自動詞の可能形、自動詞のテイル形、他動詞のテイル形、他動詞の受身形など様々な形式が見られた。これは、TJLには不適切な表現がかなり現れているということである。また、TJLは、JNSの自動詞を用いた回答が93.3%と極めて多いのに対し、自動詞の回答が33.7%と少ないことが明らかになった。実現可能場面における行為の結果を表す際に、日本語で自動詞がよく使用されるという知識をあまり持っていないということが考えられる。

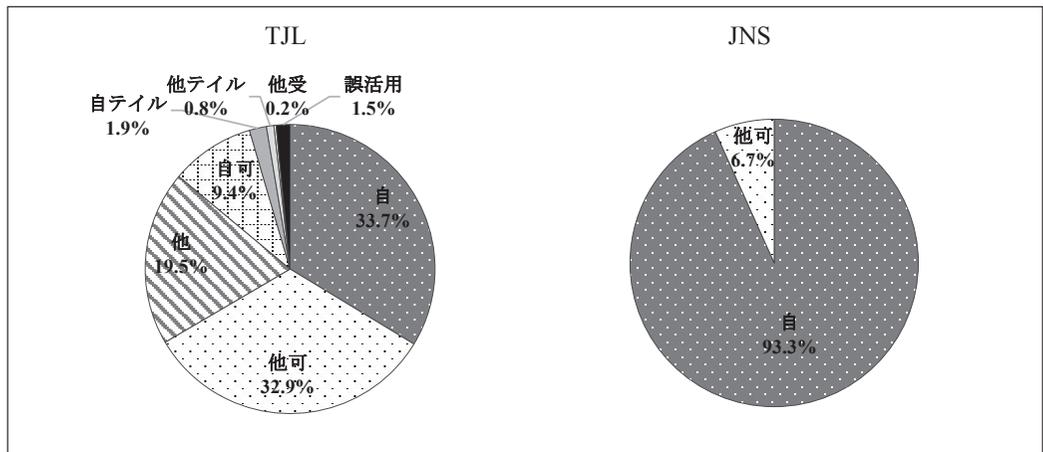


図1 TJLとJNSの実現可能場面全体にみる回答の割合

4.2 実現不可能と実現可能の場面にみる自動詞・他動詞の使用傾向

次に、各設問の実現不可能と実現可能の場面に分け、TJL と JNS の使用傾向に着目していきたい (図 2)。

TJLにみる実現不可能と実現可能の場面の回答は、どちらの場合も自動詞の回答が90%以上と顕著に高い傾向にあるJNSと異なり、実現不可能の場合、他動詞の可能形を用いた回

答が49.5%と最も多く、自動詞を用いた回答がわずか19.8%である。一方、実現可能の場合は、自動詞を用いた回答が47.6%と最も多く、他動詞の可能形を用いた回答はわずか16.2%である。つまり、TJLでは、実現不可能の場合と実現可能の場合において自動詞、他動詞の可能形を使用する割合が逆転することが分かった。

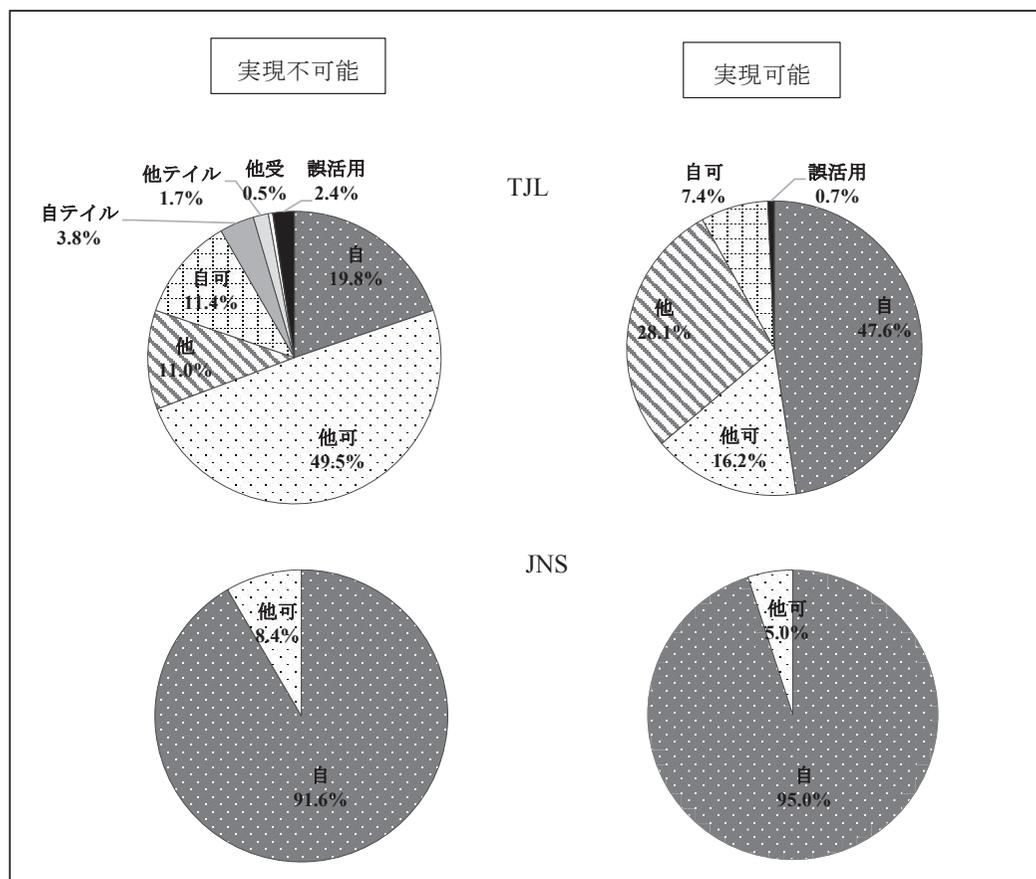


図2 TJLとJNSの実現不可能と実現可能の場面にみる回答の割合

この結果から、TJLが実現不可能の場合のほうが他動詞の可能形で表現する傾向にあることが考えられる。一方、実現可能の場合のほうは可能形に変えずに自動詞で表現する傾向にあることがTJLの特徴的な表現ではないかと考えられる。TJLへのインタビュー結果から考察できることとして、このような特徴が見られるのは、ある行為が実現不可能であるときに他人に助けを求めるため、不可能であることを強調するために可能形で表現しようとするのが理由として挙げられる。一方、ある行為が実現したとき、実現できたことを強調しなくてもそのものの変化の状態を相手に伝えることができるため、自動詞で表現したということが分かった。

また、TJL だけに見られる回答（自動詞・他動詞の可能形以外の回答）の特徴として、実

現不可能と実現可能の場合の両方において、他動詞と自動詞の可能形の回答が多いことがあげられる。その中でも特筆すべきことは、実現可能の場合において他動詞を用いている回答が極端に多いことである。このことから、TJLが何らかの要因により他動詞を多用する問題を抱えていることもうかがえる。TJLへのインタビューから、このような問題は、実現可能の場合は可能を強調する必要がなく、行為を行ってその結果実現可能となったのだから他動詞だけである行為が実現したことを表せると、TJLが考えていることが影響していると思われる。

4.3 場面別にみる自動詞・他動詞の使用傾向

続いて、場面ごとに自動詞と他動詞の現れた回答割合を分析した。その結果は図3に示す通りである。

JNSの回答は、どちらの場面においても自動詞を用いた回答が他動詞の可能形より高い傾向にあるのに対し、TJLの回答は、自動詞の回答率が高い場面もあれば他動詞の可能形の回答率が高い場面もある。ということは、JNSは、どの場面に対しても同じ観点で事態を捉えており、その動作を受けた物の変化や結果などの「物の視点」に注目し、物の状態を表しているため、自動詞を使用する。一方、TJLはさまざまな観点で事態を捉えており、「人の行為」に注目したり、「物の状態」に注目したりしており、それが多様な言語表現の選択につながったものと考えられる。

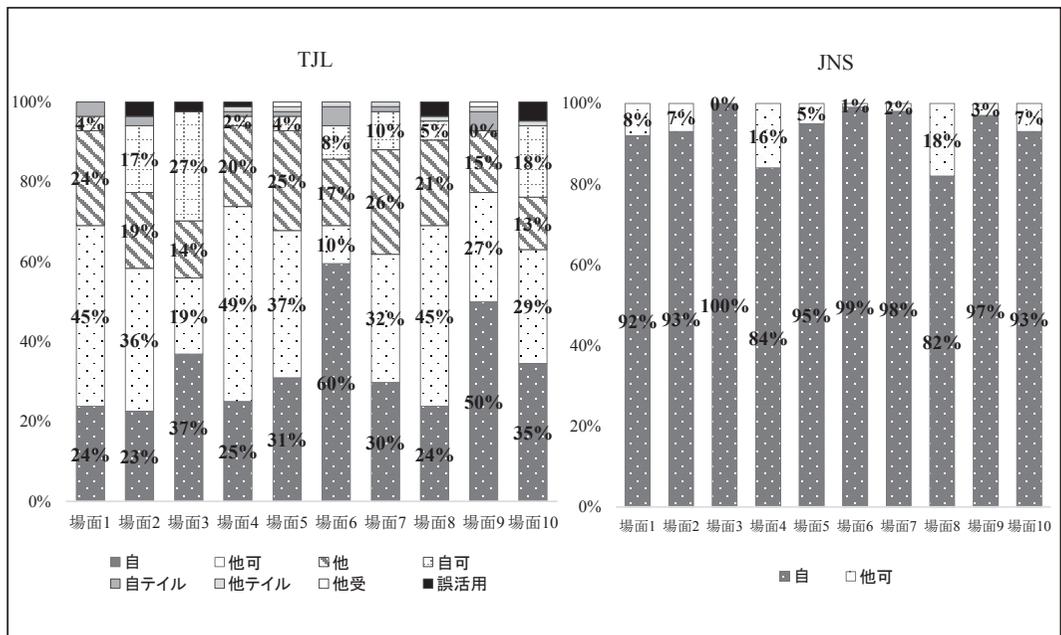


図3 TJLとJNSの場面別にみる回答の割合

5. おわりに

以上、本稿では実現可能場面における行為の結果を表す表現を中心に、日本語母語話者と比較しながら、タイ語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の選択について見てきた。その結果、日本語母語話者は、実現可能場面である行為が実現したか否かを表現する際に、全体的にも、場面別にも、自動詞の使用が他動詞の可能形より圧倒的に多いのに対し、タイ語を母語とする日本語学習者は、全体的にも、場面別にも、日本語母語話者に比べて自動詞の使用が少ない傾向にあった。また、学習者では、実現不可能の場合と実現可能の場合とでは、自動詞の使用と他動詞の可能形の使用の傾向が一致せず、むしろ逆転することが分かった。さらに、他動詞や自動詞の可能形などによる誤用もかなり見られたため、日本語教育上、注意を要する。

これらの結果から、行為の結果を表す表現にあたって、日本語母語話者とタイ語母語話者の自動詞・他動詞の選択の感覚や事態の捉え方に違いがあることが分かった。両者の違いが具体的にどのように違うのかを今後さらに詳しく考察し、これらの違いを日本語教育に資することができれば幸いである。

注

- ¹ 本稿では、意図的な行為により、その行為が実現したか否かを示す場面を「実現可能場面」とする。
- ² セーリム(2014)で実施した調査と同様である。本稿では、日本語母語話者とタイ語を母語とする日本語学習者の自動詞と他動詞の使用傾向を比較するために参照する。
- ³ 日常生活でよく遭遇すると思われるトラブル場面をGoogleで検索し、多くヒットした場面の解決方法を参考に、設問場面を設定した。
- ⁴ 初級の語彙は、『日本語能力試験出題基準(改定版)』3・4級の語彙(2002:21-32)、『日本語単語スピードマスター』日本語能力試験N3・N4・N5の語彙(2010)を参考にした。
- ⁵ このリストは、自動詞・他動詞の語彙を覚えていない、あるいは分からないことが回答に影響を及ぼさないよう、テストの妥当性を考慮したリストである。自動詞・他動詞の語彙能力を測定するためのものではない。

【参考文献】

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 石川守(1991)「自動詞と他動詞の用法について―「人の視点」と「物の視点」に関して―」『語学研究』第64号拓殖大学 pp.35-80
- 市川保子編(2010)『日本語誤用辞典―外国人学習者の誤用から学ぶ 日本語の意味用法と指導のポイント―』スリーエーネットワーク
- 王怡韓(2012)「中国人学習者における日本語無標可能表現の習得に関する研究―この役はあの新人俳優にはつとまらない―」『日本語研究』32号 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1-14

- 関承 (2014) 「中国語母語話者における日本語自・他動詞の習得研究—中国語で可能標識が使われる表現を中心に—」 広島大学大学院国際協力研究科 博士論文
- 楠本徹也 (2014) 「有対自動詞可能構文における意味的組成関係—他動詞有標可能構文との比較において—」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 40 号 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.103-111
- 倉品さやか (2010a) 『日本語単語スピードマスター BASIC1800』 (日本語能力試験 N4・N5) ジェイ・リサーチ出版
- 倉品さやか (2010b) 『日本語単語スピードマスター STANDARAD2400』 (日本語能力試験 N3) ジェイ・リサーチ出版
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準 (改定版)』 凡人社
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—」 『文藝言語研究言語篇』 29 号 筑波大学文藝・言語学系 pp.41-56
- セーリム, パンニー (2013) 「タイ語を母語とする日本語学習者の「自動詞の可能形」の誤用に関する研究」 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 修士論文
- セーリム, パンニー (2014) 「日本語母語話者にみる行為の結果を表す表現の使用傾向—実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形—」 『日本語・日本文化研究』 第 24 号 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 pp. 48-58
- 中石ゆうこ (2005) 「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究—「つく - つける」、「きまる - きめる」、「かわる - かえる」の使用状況をもとに—」 『日本語教育』 124 号 日本語教育学会 pp. 23-32
- 封小芹 (2005) 「可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得—中国語を母語とする学習者を対象にした調査に基づいて—」 『ことばの科学』 第 18 号 名古屋大学言語文化研究会 pp. 143-162
- 本多啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学—「私」は自分の外にある—』 開拓社
- 望月圭子 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」 『東京外国語大学論集』 第 78 号 東京外国語大学 pp. 85-106
- 森田良行 (1981) 『日本語の発想』 冬樹社
- 楊彩虹 (2007) 「可能の意味を持つ日本語自動詞の習得—中国語話者と韓国語話者を比較して—」 『言語と文化』 創刊号 京都外国語大学大学院外国語学研究科 pp. 51-71
- Chawengkijwanich, Somkiat. (2008) Problems on Acquisition of Japanese Transitive and Intransitive Verbs by Thai Students of Japanese, *Journal of Liberal Arts*, Vol.8, No.1, Faculty of Liberal Arts, Thammasat University, pp.79-108
- Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kuroasio Publishers